

## 「フォイエルバッハ・テーゼ」における「新しい唯物論」について

佐々木 隆治（一橋大学大学院・博士課程）

本発表では、「フォイエルバッハ・テーゼ」における「新しい唯物論」の意義について考察したい。

従来、フォイエルバッハの唯物論を批判した「フォイエルバッハ・テーゼ」（以下、「テーゼ」と略す）の（1）は「主体－客体」の弁証法として理解され、『経済学哲学草稿』と同一の理論的地平において捉えられることが少なくなかった。しかし、テーゼ（1）をただフォイエルバッハの唯物論における主体的活動の側面の欠落を批判したものとして理解するのでは不十分であろう。というのも、テーゼ（1）における批判の焦点は、むしろフォイエルバッハが「感性」を「客体または直観 *Anschauung* の形式」において捉えた点にあると言えるからである。テーゼ（1）における、感性を感性的人間活動として、すなわち実践として主体的に把握するというこの意味はあくまで「客体または直観の形式」への批判との関連で捉えられなければならない。つまり、ここでは「客体または直観の形式」において「感性」を捉えること、言い換えるならば、ただ感性にもとづく直観によって真に現実的な客体を得ることができるのであり、それゆえ感性こそが真理の基準である、というフォイエルバッハの「感性」概念の核心そのものが批判されているのである。

だとするならば、なぜマルクスは感性を「直観」において把握することを批判したのだろうか。それは、フォイエルバッハの「啓蒙主義」を批判するために他ならない。フォイエルバッハは世俗の実践から切り離された感性的直観によって現実＝真理を把握し、そのことによって人々を啓蒙し、幻想から解放しようとする。しかし、マルクスに依れば、そのようなことは不可能だ。というのも、テーゼ（8）および（4）で述べられるように、われわれはつねに実践的諸関係の内部にあるのであり、まさにそうした実践的諸関係から幻想的諸形態が生まれてくるからである。諸関係による規定性のあり方はたんなる直観によっては決して変えることができない。われわれの思惟や行為を制約する現実的諸関係そのものを変革する試みの中で、はじめてそれを変えていくことが可能になる。それこそが、マルクスがテーゼ（3）で述べている革命的実践なのである。

テーゼ（10）で言われる「新しい唯物論」の意義は、以上のような「啓蒙主義」批判を踏まえて捉えられなければならない。感性的直観によって宗教や抽象的思弁を批判し、乗り越えようとするフォイエルバッハの唯物論はもはやマルクスにとって変革を可能にするものではあり得ない。むしろ現実の変革のためには、実践的にしか乗り越えることができない現実的諸関係の制約を厳しく捉えることが必要となる。このような「実践的・批判的」な構えこそが、「新しい唯物論」の核心なのである。